

成績データ解析結果を基盤とする改善策の有効性の検証

研究代表者：波多野 紀行（高等教育ユニット）

研究分担者：武田 良文（高等教育ユニット）

茂木 眞希雄（高等教育ユニット）

【本研究の目的】

薬学教育システムが6年制に移行して11年が経過した。本学でも多くの学生が卒業し、医療分野を中心に様々な臨床現場で活躍している。6年制薬学教育の根幹にあるのは、実務実習を中心とした臨床教育の充実であり、本学においてもコアカリキュラムに従った臨床教育を実践し、多くの優れた薬剤師を社会に輩出してきた。しかし最近、学力不足のために留年を繰り返す学生が増加し、また退学を余儀なくされる学生も散見されるといった負の側面が顕在化してきた。学力不足を原因とする留年率および退学者の過剰な増加は、本来の薬学教育の趣旨とは大きくかけ離れており、早期是正が社会から求められている。

本学における薬剤師国家試験合格率は6年制が始まって以降、常に全国平均を上回っている。2015年度の新卒合格率も94.0%であり、全国平均新卒合格率86.2%を大きく上回っている。しかし、6年生時において卒業延期となる学生の数は増加し続けており、2015年度も31名の6年生が卒業延期となっている（2016年度は33名）。2015年度の卒業延期生率（受験者/申請者）は17.4%であり、この数字は全国平均である10.3%を大きく超えている。さらに本学の2015年度のストレート合格率（2010年度入学者におけるストレート合格率）は53.2%であり、入学者の2人に1人しか、ストレートで薬剤師国家試験に合格することができないという状況が続いている。薬剤師国家試験に合格することと大学教育の達成目標は決して同一ではない。しかし、多様な知識、正確な技術、医療人としての倫理観を有した薬剤師を養成し、健康社会に貢献するという本学のポリシーを達成するためには、卒業時に薬剤師国家試験に合格し、

薬剤師として社会に貢献できる学生を養成する必要がある。つまり、学生が薬剤師国家試験にできるかぎり短期間で合格することができるよう、カリキュラムを適切に編成し、教育・指導を行う必要がある。

本研究の目的は、本学で編成されたカリキュラムと学生の意識および学習目標達成度を照らし合わせることで、現カリキュラムにおいて多くの学生が学習目標を達成できない要因を究明することにある。本研究結果から見出した原因を改善していくことができれば、過度な留年率の増加を抑制し、効果的にストレート合格率を改善することができると考えられる。本研究ではこの研究目標を達成するため、(1)～(3)の研究計画を立案、実施した。また2016年度は、薬学教育モデル・コアカリキュラム（改訂版）を基盤とした新しいカリキュラムが2年生を対象に開始される年度でもある。新たに導入されたカリキュラムの有用性を検証するという目的においても、本研究の実施は有効であると考えられる。

【研究結果】

(1) 昨年度提案した改善案の実施

春学期定期試験の前（2016年6月21日）に2年生を対象としたオリエンテーションを実施し、定期試験の重要性を説明した。また、これまで本学では「定期試験の日程発表は1ヶ月前」としていたのを改善し、より早い時期に試験日程を発表できるよう働きかけ、春学期は定期試験の41日前、秋学期は定期試験の60日前に試験日程を発表した。（実施者：波多野）

(2) 2年生に焦点をあてた教育アンケートの実施および解析

2016年度薬学部2年生全員を対象として、秋学期定期試験の成績配布日に記名式アンケートを実施した。アンケートの内容は、プリコード回答法38問と自由回答法1問である。このアンケート結果を集計し、解析を行った。解析後、対象を再試験数によって3群（0~4科目：上位、5~9科目：中位、10科目以上：下位）に分類し、アンケート結果の再集計・再解析を行った。その結果、上位と下位では得意とする科目、苦手とする科目に違いがあることが分かった。また、上位と下位において、定期試験に対して取り組む姿勢が大きく異なるのではなく、勉強の仕方が分からないことが成績を下位に留まらせている要因であることを明らかにした。

本アンケート結果および解析結果については、第5回サイエンスフォーラムにおいて学内の教員に向けて発表し（発表者：波多野）、教員における学生情報の共有化を試みた。（実施者：波多野、武田、茂木）

(3) 改善案の策定

アンケート解析結果を基盤として、新カリキュラムの問題点を抽出した。また、これらの問題点を改善する案を策定し、2017年度新たに発足した基礎薬学教育対策委員会において改善案の提案を行った。これら改善案の一部は、2017年度において既に実施済みである。改善案を実施したことによる成果についても一部は解析を終了しており、解析結果は第2回日本薬学教育学会大会（名古屋）において発表を行った。（実施者：波多野、武田、茂木）

総括

より有効性の高い薬学教育を実践するためには、外部による質保証および内部における質保証を常に実施し、教育の質の向上に努めていかななくてはならない。本研究を進展させることは、本学における薬学教育の内部質保証システムの構築につながると期待される。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、多大な援助をして

いただいた愛知学院大学薬学部医療薬学生命研究所に深く感謝申し上げます。

研究成果

学会発表

1. **波多野紀行**、茂木眞希雄、武田良文、安池修之：薬学専門科目へつながる初等教育確立へ向けた取り組み ―学生アンケートを基にした解析結果からの新たな試み―
第2回日本薬学教育学会大会、名古屋、平成29年9月2日、P-016